

天然ブリ仔資源保護培養のための基礎調査実験<sup>\*</sup>

## 若年ブリの標識放流とバイオテレメトリーによる追跡調査

杉村 允三

## 目 的

日本栽培漁業協会が実施する天然ブリ幼稚魚資源保護培養実験の一環として、既往の資源生態調査を踏まえ、来遊機構の解明に不可欠なブリ幼稚魚期の分布・行動生態についての基礎的事項を明らかにすると同時に、天然ブリ幼稚魚資源の保護培養実験のより充実した進展に期することを目的とする。

本年度実施した調査事業の成果の詳細は「天然ブリ仔資源保護培養のための基礎調査実験 昭和58年度報告」に報告されている。

## 方 法

紀伊水道並びに紀南海域は、幼魚から2, 3才魚までの若年ブリ成育海域であり各漁業の利用頻度が高い。このためブリ幼稚魚期の生態を知るための手法として若年ブリの標識放流とバイオテレメトリーによる追跡調査を実施し、その再捕結果及び追跡結果等から同域を主にした移動回遊を把握するための検討を試みた。

なお、標識放流海域は、潮岬灯台 267 度 4 海里（真方位）であり、追跡海域は白浜町番所の鼻灯台 280 度 4 海里（真方位）であった。

## 結 果

- 1) 若年ブリの中でも、大型魚は湾内において瀬付き化し逸散度を弱めるが、小型魚は内湾域よりも外海域に分散する習性が強く流れ藻への依存度が大きい。
- 2) 黒潮並びに芸東、紀南、熊野灘分枝流の高温水と内海、沿岸系の低温水の強弱変動によって、移動方向や速さも異なってくる。
- 3) 時間経過に伴う水平移動は、円滑に行なわれているものではなく、時々刻々と変化し昼間の遊泳速度は減少、日没の薄明時より増加する傾向にあるが、周期性は認められない。
- 4) 垂直方向の速度幅は、水平方向の速度幅に比較して極めて小さい。また、単位時間内における水平移動と垂直移動の活発な時間帯は、概ね逆比例する。
- 5) 昼夜における遊泳深度に差は認められず、明るさによる刺激は若年ブリの垂直行動に影響を及

\* 天然ブリ仔資源生態調査委託事業費による。

ぼしていない。

6) 設置された漁具による何等かの刺激（視覚・音圧的レベル）からの、一種の逃避行動とも取れる着底現象を示した。